



移植病院 訪問

⑭川崎医科大学病院

若い移植病院で高齢者に

瀬戸内海に面する岡山県倉敷市は倉敷川沿の白壁の町並みが「美観地区」として有名な観光地ですが、そののどかな郊外にあるのが川崎医科大学付属病院です。よく、神奈川県の川崎市と誤解されることも多いようですが「川崎」は創立者の名がその由来で、神奈川とは全く関係がありません。

川崎医大の血液内科

川崎医大の血液内科は、先天性溶血性貧血の専門的な検査ができる国内では数少ない病院として有名で、全国から診断の相談が寄せられています。とはいえ、溶血性貧血の入院患者さんはわずかで、血液悪性疾患が年々増えているそうです。ここで造血細胞移植が始まったのは1994年の自家末梢血幹細胞移植からで、血縁者間の同種末梢血幹細胞移植は2002年からですから、比較的若い移植病院と言うことができるでしょう。

全国3位の症例数に

2005年からは血縁者間の骨髄移植も行い、少しずつ症例を積み重ねて2005年からはさい帯血バンクの登録病院になりましたが、何と2009年には一挙に20例のさい帯血移植を実施して、さい帯血移植数では全国で第3位を記録しました。ちなみにこの年の1位は虎の門病院、2位は北九州市立医療センターでした。川崎医大も北九州医療センターも骨髄バンクの認定病院にはなっていないので、これらの施設はさい帯血移植が特徴的な病院ということができそうです。

移植でも さい帯血移植に特化

血液内科の和田秀穂教授は「岡山県には造血細胞移植ができる病院がた

くさんあります。もともと岡山大学病院は血液内科が盛んでしたし、倉敷中央病院では骨髄バンクの非血縁者間骨髄移植を積極的に行っています。そんな環境の中からさい帯

血移植という特徴ができてきたんでしょうね」とその背景を語っています。現在は骨髄バンクの認定病院としても申請中で、さい帯血移植で積んだ実力をあらゆる移植ニーズに応えられるようにしていく、と積極的な姿勢をみせています。

高齢者移植でも 好成績

川崎医大には12室の無菌室があってさい帯血移植に臨んでいますが、最近ではコンスタントに毎年20数例の同種移植を行うようになりました。移植担当の松橋佳子医師は「うちは高齢者の移植が多いんです。これまでに67例のさい帯血移植を行っていますが、患者さんの年齢は中央値で59歳です」と川崎医大のさい帯血移植の特徴を語ってくれました。確かに、67例の移植患者で年齢は20代は2人、30代は3人ですが、50代は24人、60代は25人もいます。また「非寛解での移植も多く、ハイリス



クとスタンダードリスクでは3：1でハイリスクが多いんです」とのことですが、移植成績もなかなかのものです。

さい帯血移植と GVHDの低さ

スタンダードリスクでの移植成績（生存率）は70%になりますが、ハイリスクだと30%に落ちるそうです。でも、そうした患者さんたちはこれまですべて亡くなっていたことを考えると、さい帯血はこれまで移植ができなかった患者さんたちにも生きる機会を与えることができたのではないのでしょうか。田坂大象准教授は「さい帯血移植はGVHDが少ないというのも移植患者さんの生活の質を考えると重要ですね。ひどいGVHDで苦しんでいる方を見るとそう思います。これからは低いGVHDで高いGVL効果を出せるようにしていきたいですね」と今後の抱負を語っています。